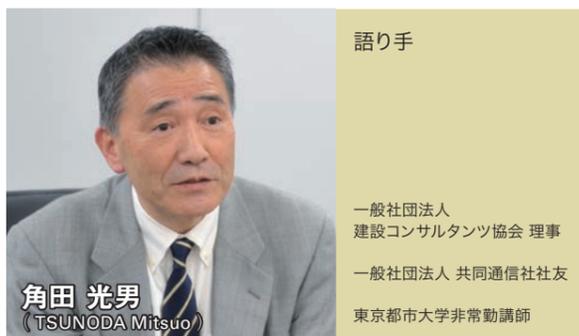


復興に果たした建設コンサルタントの役割



語り手

一般社団法人
建設コンサルタンツ協会 理事
一般社団法人 共同通信社 社友
東京都大学非常勤講師

角田 光男
(TSUNODA Mitsuo)

1948年東京生まれ。東京工業大学工学部(社会工学専攻)卒業。1972年共同通信社に入社。編集局科学部、社会部、メディア局などに在籍した。被災地とのつながりでは、仙台と盛岡に合せて10年勤務した。2008年定年退社。その後2012年9月までメトロポリタンテレビ(MX)ニュースコメンテーター。著書に「メディアつれづれ帖」「9chテレビつれづれ帖」などがある。

『命の道』を切り開く

前川:2014年1月に当協会から『東日本大震災『命の道』を切り開く 3・11最前線の初動 13人の証言』が発刊されました。現地に赴き、いろいろな方の話を聞いて執筆されたと聞いています。

角田:東京工業大学を卒業し、共同通信社での40年の記者生活で、盛岡で4年と仙台で6年過ごし、東北は「第二のふるさと」と思っていたところ、2011年3月11日に東日本大震災が起こりました。すぐに行きたかったのですが、仕事の関係で東京を離れることができませんでした。2011年5月に震災後初めて行き「ここは自分の人生を重ねてきた所なので、取材して何かの形にしなければいけない」と思ったわけです。

そんな矢先、建設コンサルタンツ協会の50周年記念で何か本を作りたいとの話が舞い込みました。実は、津波で被災した直後に、第一線の土木に関わる人たちは、道路の瓦礫を取り除く「啓開」を官民連携で取り組みましたが、あまり知られていません。そのため「初動時に不眠不休で頑張った人たちのことを書かないか」と言われました。私も現地を少し取材していたので「やりましょう」となりました。

共同通信社時代の同僚のOBカメラマンと2人で沿岸を歩きました。本には13人しか載せていませんが、もっ



聞き手

一般社団法人
建設コンサルタンツ協会
前副会長

前川 秀和
(MAEKAWA Hidekazu)

1955年石川県出身。東京大学工学部土木工学科卒業後、建設省(現・国土交通省)入省。大臣官房技術調査課長、北陸地方整備局長、道路局長を歴任。2013年11月から(一社)建設コンサルタンツ協会顧問、現在副会長兼専務理事を歴任。また、2006年3月に金沢大学大学院環境科学専攻で工学博士を取得、東京工業大学屋井鉄雄教授と共著の『市民参画の道づくり(ぎょうせい)』がある。

と多くの人と話をしました。震災から1年半くらい過ぎていましたが、それでも、ご当地人たちにとっては、思い出すのも苦しいようで、言葉に詰まることが何度もありました。

前川:この本は点字図書館の蔵書にもなっていて、目の不自由な方にも読まれているとお聞きしました。

角田:東京・高田馬場の社会福祉法人日本点字図書館に点字図書や録音図書があります。震災から丸5年となる2016年の3月に録音図書となりました。ボランティアの女性が落ち着いた声で「題名はこうです、目次はこうです」と、丁寧に読んでいます。元インタビューでしたから、話し言葉がすごくなじみます。5年の時を経て耳で



写真1 書籍『命の道』を切り開く』の表紙

写真2 冊子『震災復興への道のり』の表紙

聞ける形になったのは素晴らしいことだと思います。目や耳の不自由な方も災害のときの備えとして、そういう経験を事前に知っておくことはとても参考にもなります。

また、こういう出版は法律的に著作権から除外されてフリーにできると知りました。インターネットを検索していたらヒットし、図書館に連絡したら録音されたCDを送って頂きました。これには、思ってもみない嬉しさがありました。できれば建設コンサルタンツ協会会員会社の人、家族の人、広く土木・建設の仕事に携わっている人たち、これから土木を目指そうとしている若い学生さんたちにこの本を読んでもらいたいと思います。

建設コンサルタントの使命

前川:2016年3月、当協会では『震災復興への道のりー建設コンサルタントの使命ー』を発刊いたしました。それまで事業主体の方々からは、最初の段階で建設コンサルタントの皆さんに大変頑張ってもらったと聞いていました。あれだけの被災を受けて、被災調査をして、どこがそのまま使えるか、使えないか、新しく造り直さなければいけないかを判断して、早く造り直すにはどうしたらよいか、技術的な課題も含めクリアするような設計をして、どれだけの費用がかかるかというのをはじいたのが建設コンサルタントです。そこまでしないと発注者も予算の手当てができないし、工事も発注できません。そのため、建設コンサルタントの仕事が、全体のスピードに影響する一番大事な部分で、そこをいかに縮めるかが、復旧・復興のスピードにつながります。しかし、大変感謝された割には、建設コンサルタントの活躍を記事やニュースで見ることがありません。「それなら自分たちで作ろう!」ということになりました。

角田:土台を黙々と支える人たちがいるから世の中がきちんと動きます。やはり、そういう仕事は尊いですね。日本の多くの人たちが、その仕事をする建設コンサルタントの人たちに気が付いて欲しいと思います。

建設コンサルタントは官庁と民間を接合するような役割を果たしていると強く感じました。官庁にも、国土交通省や被災した自治体があり、地域や流儀の違いをうまくコミュニケーションして仕事を進め、本当に大変厳し



写真3 2011年3月23日の南蒲生浄化センター

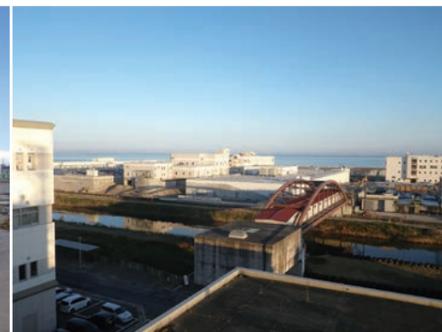


写真4 2015年11月2日の南蒲生浄化センター

いやりくりの中で仕事をされてきたと思います。もう一つは、取材の仕事は常にそうですが、よく『『じょうり』をもって事をなす』と言います。私が考える「情理」とは「人情と道理」のことです。情と理を尽くして、被災した人たちのために、いろいろな気持ちを汲み取って役割を果たしていました。

前川:自治体の職員自身が被災しています。しかも、これほどの膨大な仕事を行った経験はありません。限られた人数ですので、建設コンサルタント頼みなどところが多分にあったと思います。そういう意味では、住民の皆さんとのコミュニケーションを含めて、設計の技術力や日頃の経験と知恵といった総合力が発揮されたと感じます。

角田:私は東北にいた10年間、いろいろな所を歩いてきました。そのため、自分とつながりがある所にどうしても目が行ってしまいます。例えば、建設コンサルタントの2人が、岩手県の釜石市役所で職員4人をサポートしました。復興の基本方針をまとめて、震災1カ月後の4月11日に発表されたその土台を作ったのは建設コンサルタントです。建設コンサルタントは、南から北までいろいろな仕事の経験があり技術力は非常に高く、速い時間で適切なものを作ることができます。大変な思いをされたと思いますが、これは素晴らしい、とてもいい仕事をしたと感じました。

また、宮城県の仙台市東部にある南蒲生浄化センターには思い入れがあります。南蒲生には日本でも有数の渡り鳥が来る大きな干潟がありました。仙台の市域が大きく発展していく中で本格的な下水処理場を造る必要があり、その候補になって議論になり、若い頃には何度も蒲生に行きました。その結果造られた下水処理場も大津波を受け壊されましたが、震災から4年8カ月で半分ぐらいまで復旧したことをこの本で知りました。そのとき、干潟の風景とそこに下水道処理施設ができてい



写真5 青山士と宮本武之輔の「信濃川大河津分水路」の旧可動堰



写真6 2011年11月23日に供用を開始した新可動堰

く過程の光景が浮かびました。建設コンサルタントの頑張りには胸に迫ってくるものがありました。

前川:私も「皆さん本当に、何でもここまで頑張れたのかな」と思います。火事場のばか力なのか、あそこまでできた理由は、壊れたものを目の当たりにして、自分がやらないわけにはいかないという技術者としての使命感と復興に貢献したいという強い意志、その二つがあったからだと思っています。

角田:苦しんでいる人がいるなら、立て直すために、自分たちの知恵を惜しまず出すことが、頑張りの源だと思います。そういう気持ちを持ってずっとやってきたのではないのでしょうか。

緊急時のルール

前川:震災から5年経過して、何か気になることはありますか。

角田:東北の高速道路をめぐって東京地検特捜部が談合の摘発をしたニュースを読んだとき、「震災から1カ月、3カ月、半年、1年のとき被災地はどういう状況だったのだろうか」を、自分なりに思い浮かべます。法律を当てはめればこうだという見方はできるかもしれませんが、もう少しあのときの状況を思い出して欲しい。復旧・復興のときに港に入る船は「早く着いた船を、急ぐ港に」という緊急ルールみたいなものがありました。本来は手続きが必要だとは思いますが、行政なり国なりが緊急ルールで対応しました。

前川:平常時と緊急時の公共調達ルールが同じである必要はないし、逆に同じではいけないと思います。あれだけの災害ですから、その地域の会社は被災し機械設備も被害にあって、できる人はそもそも限られているわけです。復旧を一番早くできる人、能力のある人、人

を集められる人を発注者が調査して、1人しかいなかったら特命随意契約をお願いすればいい。3社なら指名競争にして「とにかく、こことこことこを分担してやってくれ」と要請すればいいと思います。今言われた「緊急ルール」というのをきちっと作っておかないと、いずれまた同じようなことが起きます。首都圏直下型地震とか南海トラフ地震の可能性もあるわけですからね。それに限らずとも災害が頻発しているので、平常時と違うルールを国全体としてあらかじめ合意しておくことが非常に重要だと痛感しました。

角田:事前に用意をしておけば「これでいきましょう」と行政のほうから声をかければ動けます。

前川:建設コンサルタントには施設を設計した人がいます。どういう考え方で設計したかは、その人が一番よく分かっています。被災したときに現地に行けば、すぐに「こことこをこうしたら直せる」という提案ができるはず。そういうこともルール化すれば、初期対応でスピードを要求される場合は、格段に速くなると思います。

熊本地震

前川:4月14日に始まった熊本地震によって甚大な被害が生じ、未だに多くの方々が避難所生活を余儀なくされています。犠牲になられた方、被害を受けられた方にご冥福とお見舞いを申し上げます。

建設コンサルタンツ協会では地震発生直後から九州支部を中心にインフラの被害調査を開始しました。関係機関と連携し一日も早い復旧復興に全力で取り組んで参ります。

角田:熊本地震で犠牲になられた方々のご冥福と、被害に遭われた方々、いまなお避難生活をされている方々に対しお見舞い申し上げます。

特に私は東京都市大学で、親元を離れ全国から集まる学生たちを相手に授業を受け持っていますから、学生アパートがもろくもつぶれ、前途ある若い命が失われ



写真7 2012年8月11日の旧可動堰の撤去式にて。左から前川北陸整備局長、宮本信（宮本武之輔ご子息）、青山多恵（青山士ご子息）、常山信濃川河川事務所長

たり、大けがをしたりしていることに胸が痛みました。多くの建設コンサルタントや土木人が、復旧・復興に懸命に尽くされていると思いますが、あらためて「初動の対応」とさまざまな分野での「検証」に力を入れてほしいと思います。

社会貢献に直結する仕事

前川:未来を担う建設コンサルタント技術者になってもらうために、いい考えはないのでしょうか。

角田:記者時代に私が大切にしてきたことは「人に会うこと、旅をすること、本を読むこと」です。これを自分のモットーにしてきました。建設コンサルタントの若い人たちも、生身の人間に会うこと、旅をして新しいものを見ることが大事だと思います。

それと、本を読むことで先人を知ることができます。廣井勇という明治から大正にかけての土木人がいました。札幌農学校で若い頃に社会への奉仕の精神をたたき込まれ、後に土木学者、現場実践監督、教育者になりました。また、私は東京の下町生まれですが、下町を大洪水から守る「命の防波堤」といわれる荒川放水路を造った静岡出身の青山士という土木技師がいました。さらに、八田與一という金沢出身の人は烏山頭ダムを造り、台湾の荒地を緑野にしました。今も台湾の人はこの人を忘れていません。

現代ならアフガニスタンで活躍するドクターの中村哲さんです。九州出身で、九州大学医学部を卒業した医者ですが、故あってアフガニスタンに渡って診療をしていました。ところが飢饉などがあって、「医者は100人の命を救っても、万単位の命を救うことはできない。万単位で救うためには、水を引いて、農業で小麦を作らなけ

ればならない」と考えを新たに、アフガニスタンで灌漑用水を造っています。九州の川の灌漑用水などを独学で勉強したそうです。こういう先人たちが現代に生きる土木人を、若き建設コンサルタントの人が知ることは、いいお手本になります。ぜひ本を読んで欲しいと思います。

前川:余談ですが、今話があった青山士に関してですが、信濃川大河津分水路の可動堰の老朽化と流下能力の向上のため、新可動堰が完成しています。私が北陸整備局長だった際に、青山士と宮本武之輔が精魂傾けて建設した旧可動堰は、一部を残して解体することになりました。このため、大変珍しいことですが、大河津分水路旧可動堰撤去式を実施いたしました。両先人のご子息の方にも出席頂き、多くの方々が旧可動堰に感謝を込めて名残を惜しみました。また、八田與一は私と同じ金沢の出身で大学も同じですので昔から注目してました。このような偉大な先人の業績を世の中に紹介することも、大変重要で意味のあることだと思います。

『震災復興への道のり』の鼎談で、大島一哉前建設コンサルタンツ協会副会長が、「建設コンサルタントの仕事そのものが社会貢献に直結している非常に恵まれた職業だ」と言っています。仕事をして社会貢献したという誇りを感じることができるのは、職業人としても非常に幸せだと思います。こんなに恵まれた職業で、幸せな思いをできる分野ですので、もっと優秀な学生がどんどん入ってきて頂きたいと思っています。『震災復興への道のり』がその一助になれば大変うれしいことです。

<写真提供>
角田氏・前川氏顔写真、写真8 初芝成應
写真3、4 株式会社NJS
写真5 平田潔
写真6 国土交通省信濃川河川事務所
写真7 常山修治



写真8 2016年4月 建設コンサルタンツ協会に於いて